

開成の杜

第76号 ●2008年6月2日 ●郡山女子大学大学院 ●郡山女子大学 ●郡山女子大学短期大学部 ●郡山女子大学附属高等学校 ●郡山女子大学附属幼稚園

●発行所/学校法人郡山開成学園〒963-8503 郡山市開成3丁目25番2号 ☎024(932)4848(代) http://www.koriyama-kgc.ac.jp ●発行人/学園長 関口富左



桜花の下で楽しいと……。

(撮影 山口郁生)

本校校法人郡山開成学園は、創立以来六十余年の歴史を重ね、今日に至っている。その間、「短大を」「大学を」「大学院を」「高校を」と、女子の高等教育を基点として各学種に於ける教育内容を広く容易に知らせるべき本紙を、学園状況内容を以ての季刊新聞「開成の杜」として出版してきた。

学校法人郡山開成学園は、六十余年を経るにおいて、その内容も多様に亘り、学種毎の教育状況、行事等々を学園人に伝え、互いにその方針、計画、実施内容等、一層充実するべく各校の教員・学生生徒、その他「父兄各位にも御理

解と参加等を求めてきた。尚また、広く社会全体の要所にも学園教育の内容、在り方等を御理解頂く方途も含めての出版であった。

この「開成の杜」の、発刊より第七十号まで全五百七十八頁を一括大冊として編集し、広く連携的理解を得るべく発刊した。学園各所には申すまでもなく、学外の諸機関にも送付提供するなど、いささかその役割を固り得たと自負している。従って今年度も更に新たな学園教育、行事の様相、内容等の周知を図るべく計画し、この度の編集出版となったのである。

知るは心親しく、更にまた新領域を捉え、学の新たな方途を求めべく継続発刊に及んだのである。

学園人各位は申すまでもなく、更によき知恵、内容表現等、多くの案件を得るべく、この度の運びに至ったのである。

了承、周知、理解、参画等、諸氏の研究成果、発表を求めらるるものである。

「知るは理解の始めであり、理解は新たな発想をも産む」ものであろう。奮つての学内各校、各部署の研究状況・成果等の報告を望む。

学生部、校友会諸子の状況等の発表もどうぞ……。

さて、本年も新年度発行の「開成の杜」の出版を実施。

本紙は、学園教育全容に亘り、広く学内各校にその状況を知らせ、互いに各学種（大学院・大学・短期大学・高等学校・幼稚園）についての状況周知を図ることの季刊紙として発行してきた。

学生と共に居る!! 学生の元氣満々たるその美しさは、新鮮にして意氣盛んである。その諸様相に誘われて、こちらにも元氣が伝わり、喜びを共にする。嬉しきかな……。



学園長 関口富左

『開成の杜』継続出版について

杜の深淵さは、一層濃く、学園の静けさを今日も伝えている。

東を見れば雲水峰の霊峰。北に安達太良。北西に懐かしい磐梯。西南に那須連邦の美景。

遠く、夕焼空の都を憶う。

学園創立六十二周年 節目を祝う記念式典 吾子よ健やかに 心と心を結ぶ大合唱



「吾子よ」を歌う大学・短大教職員の大合唱

昭和二十二年、郡山女子専門学校として創設された本学園は、短期大学・附属幼稚園・附属高等学校・大学・大学院を擁する女子の総合学園として拡大、拡充を続けた。その間、実技中心の従来の家政学から哲学的基盤を持たせた人間守護の家政学を樹立、新しい家政学を広めた。そして六十二周年。

建学の精神は「尊敬・責任・自由」

式典で学園創設者の関口富左衛門長は創設時を振り返って、教育目標を「尊敬・責任・自由」とし、お互いの個性を尊重し、理解する（個）の確立と（他）との協調をもって、自主、自立できる女性としての人間育成を図ってきたと述べた。そして、ここまで成長した際には「教職員が持てる力を発揮した」と教職員一人ひとりの学園にかけた熱意に敬意を表した。節目を祝う式典では、全教職員が壇上から、「吾子よ健やかに」と

永年勤続者を表彰

式典では永年勤続者の表彰があり、満十年から四十年勤続の十二名に関口学園長から表彰状と記念品が送られた。

表彰者は次の通り（敬称略）。

- 〔勤続四十年〕▲大学／庄司一郎 ▲短大／中川英子・鍋山友子
- 〔勤続三十年〕▲短大／大石 尚
- 〔勤続二十年〕▲大学／熊田伸子 ▲高校／宗形盛夫・渡邊泰夫 ▲事務局／和知 剛



表彰者（大学・事務局）

〔勤続十年〕▲高校／松尾智美・岡田早苗 ▲事務局／小沼依子・安田英夫

呼びかける若者賛歌「吾子よ」を歌うシーンがある。今年もこの本学独自のプログラムが進行した。教職員の呼びかけに学生、生徒が応答歌「青春の輝かさを」を合唱、学園オーケストラの高鳴る演奏に交差し、心と心を結ぶ大合唱が会場にこだました。

幼稚園でも祝う

附属幼稚園では一日早い二十一日に学園創立六十二周年をお祝いした。関口富左衛門長が「学園はあす六十二歳の誕生日を迎えます。お祝いしましょう」と述べ、幼稚園のおやくそく「よくみる よくきく よくかんがえて」をみんなですべて声を合わせた。



幼稚園の旗を掲げて学園の創設を祝う関口富左衛門長



表彰者（高校・事務局）

創立六十二周年記念 平成二十年度第一回教養講座

「漢詩と人生」（高校の部）
「漢字と文化」（大学・短大の部）

師 前二松学舎大学学長
漢字文化研究会専任理事



漢字を学びたいと語る石川先生

創立六十二周年記念平成二十年度第一回教養講座は四月二十二日、記念式典のあと石川忠久氏が講演した。大学の部では「漢字と文化」と題して講演された。

師 野間文化芸術大学学長
川勝平太氏



自然との調和を熱く語る川勝先生

平成十九年度第二回教養講座は十二月十一日、建学記念講堂で開催された。講師は野間文化芸術大学学長の川勝平太氏。
森を鎮守と崇めた日本人の自然感と地球環境について語った。
以下は大学の部の講演要旨。
地球環境と人間との関係が今不調和になっている。文明は森林を伐採し植林をしないまま緑をなくした。われわれが排出している二酸化炭素は地球の温度を上げている。このまま温暖化が進行すると、天候不順による災害が地球を侵し、

日本人がまだ文字を持たない時代に中国から漢字が渡ってきた。それを貰って日本人は表記する手段を考えた。漢字を元に万葉がな、次いでカタカナ、ひらかなを造った。そして語順の違う中国の文章を工夫して翻訳した。

（我登）山。我は山に登る。

（我説）漢文。我は漢文を説む。

このようにレヤ一、二の点をつける方法を編み出した。漢文訓読法である。これにより中国の古典を吸収し、論語も孟子も自前で読めるようになった。平安朝、奈良朝の人たちは早くもこの方法で勉強した。その土台の上に和歌や物語などの日本文化が築かれた。

日本人は漢字を基にした日本語と中国の古典の両方を身に

大自然の中で新入生が宿泊研修

新入学生を対象とした学外オリエンテーションが四月二十三日から二十六日まで、大学生・短大生五百六名が三班に分かれて宿泊研修した。会場は裏磐梯のホテル。入学後の大学生活への円滑な導入と適応を図るのが目的で、教師との共同宿泊研修により学業への取り組みと相互親睦を深めた。

開講式ではビデオによる学校案内を鑑賞し、学園の歴史を理解した。また、各学科ごとに分かれてそれぞれの科での学習内容を確認した。



開成式で心を通ずる学務部長の講話を聞く新入生

奨学生へ認定書授与
関口育英奨学金制度スタート

学業に優れ、健康で他の模範となる人物を育成する本学園独自の育英奨学金制度がこの春の入学からスタートした。

「学校法人郡山開成学園創立者関口育英奨学金制度」の初の奨学生認定式が三月二十五日、創学館



奨学生へ認定書授与

大会議室で行われた。

新大学生、短大生、高校生の各十名が保護者と一緒に出席、関口学園長が計三十名に奨学生証を授与した。これに対し、奨学生代表が挨拶し、御礼のことばと共に学業に励むことを誓った。

なお、認定された大学、短大の各十名には月額二万円、高校生に月額一万円が入学式後に支給された。

四番目の「開成の社」

熱海町安子ヶ島 国有林内で植樹

自然環境の保全や育成に取り組み本学園では、本年度の学習の一環として五月十二日から十六日まで、四番目となる学校林「安子ヶ島開成の社」に楡五千本を植えた。本学園は平成八年、創立五十周年を記念して関東森林管理局と契約し、国有林の中に、「開成の社」



植樹に汗を流す学生、生徒

を造成し、地球環境保全、緑化思想の大切さを学んできた。これまでに、郡山市熱海町地内の鞍手山に楡五千本、須賀川市長沼町の高土山に杉四千二百本、石鏡の学園総合教育園に楡七千本を学生、生徒、教職員の全員の手で植樹し、森の役割、自然の摂理を学習してきた。

今年は、安子ヶ島地内の国有林に、二千三百人が五日間に一人平均二本の楡を植えた。

社のなかで

教育教育について

近年、大学教育における、細分化された専門教育優先という現状に対して、教養教育を見直す機運が生じてきていることは周知のとおりである。そこで、教養教育について少し考えてみることにしたい。

辞典をみると、教養という言葉の意味は多岐である。また、英語では、culture(耕す、つまり自分を耕す)という言葉が、独語では、Bildung(造り上げる、すなわち自分を造り上げる)という言葉が当てられている。こうしたことから言えることは、教養教育とは、人間的成熟と知的成熟を図ること、すなわち人間を造り上げること、ことである。従って、教養教育の射程は人文、社会、自然と広範囲に及ぶ。歴史的にみると、一般教養の原型は、すでに十二世紀ヨーロッパに誕生した大学に存在したといわれ、そこでは、教養科目を示す「リ

ベラル・アーツ(自由な技)として、①共通語であるラテン語を学ぶ際に修得しなければならない「アーツ」である、文法、論理、修辭学(説得的な文章を書くための技)の三科、②自然を理解するための「アーツ」である、天文学、算術、幾何学、音楽の四科、の計七科が必須科目として定められていたという。今様に言えば、文系と理系の総合ということである。

ヨーロッパに端を発した、この教養という概念を大学教育において継承したのは、実はヨーロッパではなく、アメリカであったといわれる。アメリカがイギリスやフランスの植民地であった十七世紀前半以降に宣教師によって設置された、ハーヴァード、イエール、コロンビア、ブラウン、ペンシルベニア、プリンストン、コーネル、ダートマスなどの私立大学がそれぞれある。この八つの大学は「リベラル・アーツ・カレッジ」と呼ばれ、例えばハーヴァード大学の本体は、決して専門家を養成する機関ではなく、良きエリート市民を養成する

機関であり、それゆえ、そこでは様々な学問を幅広く学ぶことを求められているという。そして専門教育は大学院で受けることになるといわれる。

戦後、日本はアメリカの教育制度を受け入れたが、アメリカのリベラル・アーツ教育は、大学の学部・学科制度への中途半端な導入となり、極めてわずかな例を除いて、リベラル・アーツの精神は日本の大学にうけつがれることがなかったといわれる。

こうしたなかで本学は、「尊敬」「責任」「自由」の建学の精神、創立以来の芸術鑑賞講座、教養講座、宗教科に関する必修科目、などに象徴されるように、人間のおよび知的成熟をねらいとして教養教育を教育の基本としてきたといえる。この伝統をさらに発展させるために、建学の精神の具現化、教養課程の拡充、教養科目の各学年開講、広い視野に基づく専門教育、などの検討が望まれると考える。(編)

参考文献：村上隆一郎「やりなおし教養講座」二〇〇四年

特集 研修紀行

大学・短期大学部

大学と短大ではこの春、海外に、国内に分かれての研修旅行を実施した。それぞれの学科の特徴を生かした研修で見聞を広めた。

【海外研修で学んできたこと】

人間生活学科 藤井美香

私たちは二月に六泊八日でパリとローマへ研修に行ってきました。衣食住・福祉・経営をテーマに、パリではランジス総合市場や女性市民社会連合、高齢者福祉施設などを訪問させていただいたり、ローマでは日本語を学んでいる現地学生と共に地下鉄に乗りたりして、身近な生活の場を見学することができました。また、私は建築の勉強をしているのですが、日本と異なる特徴の様々な建築物を実際に見ることに、ヨーロッパ建築の杜大さや細部にまで施された技術力に圧倒されるとともに、建築への関心が一層高まりました。

今回の研修を通して、海外の良さを知るだけでなく、日本の良さも改めて知ることができました。

【沖繩研修旅行を通して】

生協副科 半澤優子

私たちは二泊三日の日程で沖繩の伝統工芸、歴史など多方面の研修旅行を体験してきました。



ローマで研修中の学生と一緒に

世界最大級の水精を有する海洋博物館公園などの魅力的な観光名所が溢れる沖繩ですが、特に印象的だったのは琉球ガラスでした。琉球ガラスの中に、沖繩の豊かな海を見、独特の歴史背景の中で培われた美しさを感じました。首里城の朱色、エメラルドグリーン、海、沖繩の風土から生み出される美しい色彩に魅了されました。しかし、その反面で戦争時の跡も何処か、平和な時代に感謝しました。

この旅行を通して広い価値観、知識を得ることができました。その収穫をこれからの制作活動に活かしていかれたらと思います。

音楽科では三月九日国内オペラ研修旅行を実施、東京サントリールでモーツァルトの「フィガロの結婚」全四幕を鑑賞しました。

【オペラを鑑賞】

音楽科 氏家 理子

指揮者のニコラ・ルイゾツケイのもと、歌手もほとんど若い勢いのイタリア人を起用、演出は現在イタリアで最も実力者といわれる演劇界の重鎮、ガブリエーレ・ラヴィア氏で見応えのある公演となりました。特に「フィガロの結婚」のアリアは私たちが声楽の授業で勉強することも多く、鍛えられた一流の歌唱力に圧倒されるばかりでした。

【中国研修旅行を経て】

文化学科 佐藤 奈津美

今回の研修旅行は、気流の乱れによる不安定な空の旅から始まりました。翌日訪れた中国の観光名所である万里の長城では広大な景色に圧倒され、その「世界遺産」を記憶に刻み込みました。北京では、天安門広場から故宮へと歩き通しましたが、中国のスケールの大きさを身をもって感じました。

旅は西安に移り、教科書でしか目にしたことなかった兵馬俑博物館を見学しました。友人と共に兵馬俑の御縁美に感嘆しました。旅の終わりは上海。今回のクライマックスともいえる上海夜景は、私にとって残念ながら満喫するまでのものではありませんでした。しかし、五泊六日の研修は私にとって短大生活の一番の思い出であり有意義な時間となりました。

研修の途上で

北京東主殿宮バックに

大学院・大学・短期大学部

郡山女子大学大学院第十七回、大学第四十三回、短期大学部第五十九回、短期大学部専攻科第九回の入学式が四月十日、建学記念講堂大ホールで行われた。

郡山開成学園オーケストラによる奏楽のあと式典に入り、大学院修士課程二名、大学百二名、短期大学部四百四名、同専攻科三名が呼名され、開成学園理事長が全員の入学を許可した。同時に大学三年への編入生六名の入学も許可した。

地域社会のよき奉仕者であれ、開成学長は告辞の中で、改めて

建学の精神「尊敬・責任・自由」の理念を記し「品位を保ち、身も心も美しく磨き、地域社会のよき存在になるべく努力しなさい」と大學生としての自覚と責任の重さを強調した。

来賓では金澤桐家協会会長、安

育悦子郡山女子大学短期大学部同窓会会長が入学を祝った。

続いて附属幼稚園の坂上萌恵さん、佐藤央さんが「幼稚園へも遊びに来て下さい」と歓迎した。

また、在校生の山下宗裕さんと「天学・食物栄養専攻科四年生は学園生活に有意義に過ごすことを勧め、先輩からのエールを送った。

そして大学院の石川雅子さん、短期大学部文化学科の田母神朔望さんが入学者を代表して「学問探求に励みます」と誓いの言葉を述べた。

私は、本学家庭学部食物栄養学科を卒業し、現在、短期大学部家政科食物栄養専攻の助手として勤務しております。より高度な学問が要求されている中でさらに人間性や専門性を高めるべく、大学院への進学を決意しました。

人間守護の理念を基に、生活の充実発展に寄与できるよう、研究に取り組みたいと思っております。



大学院修士課程 石川 雅子



大学院人間生活学科 遠藤 恵

私は、学問を追求するために、大学進学を決意しました。知の領域を広げていき、自ら成長していこうと志を高く持つことができると確信したからです。女子大学だからこそ得ることができ、女性としての品格を磨いていけることも魅力的でした。何事にも意欲的に取り組み、社会に貢献できるように教養を身につけていきたいです。



短期大学部文化学科 田母神 朔望

私は、歴史のおもしろさや不思議さ、疑問などを、もっと幅広く深く学びたいと思い、本学の文化学科を志望しました。本文化学科は、片寄った専門分野にとらわれず、幅広く学べるという点で、とても興味を持ちました。また、図書館司書、学芸員補任用資格、社会教育主事補任用資格が取得できるというのも魅力的でした。

卒業

変わらぬ思いを お元気で

大学院・大学・短期大学部

早春の柔らかな陽光が微笑み誘い、華やかさと笑顔が混じり合う中で、大学院第十五回、大学第三十九回、短期大学部第五十七回、短期大学部専攻科第七回の修了式・卒業式・学位記授与が三月十八日、建学記念講堂で行われた。

大学院修士課程三名、大学百二十一名、短期大学部四百二十一名、同専攻科二名の合計五百四十七名の各料総代に、開成学園理事長が学位記および卒業証書を手渡された。

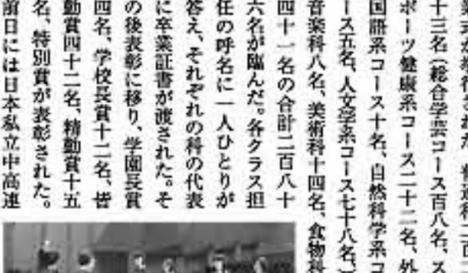
開成学長は告辞として、今日から社会の一員として出発するがその責任は重い。親への感謝を忘れず、建学の精神である「尊敬・責任・自由」を基に自分の専門性を発揮して社会に奉仕しなさい。大学はあなたたちの歩みを見守



学位記と卒業証書を受け取る卒業生総代(左から)に去りがたき心緒を述べ、今後の精進を約束し答辞とした。卒業生は郡山開成学園オーケストラが奏でる。世の光と全員の拍手に送られて慣れ親しんだ学び舎を後にした。

附属高等学校

三月三日、雛祭りのよき日、建学記念講堂において第四十九回の卒業式が挙行された。普通科二百二十三名(総合学芸コース百八名、スポーツ健康コース二十二名、外国語系コース十名、自然科学系コース五名、人文系コース七名)、音楽科八名、美術科十四名、食物科四十一名の合計二百八十八名が臨んだ。各クラス担任の呼名に一人ひとりが答え、それぞれの科の代表に卒業証書が渡された。その後表彰に移り、学園長賞四名、学校長賞十二名、世勲賞四十二名、精勤賞十五名、特別賞が表彰された。前日には日本私立中高連



各料総代に卒業証書を手渡された。開成学長は告辞の中で、「これまで育てていただいた両親への感謝の気持ちを表すことと、本校の建学の精神「尊敬・責任・自由」を忘れず、また、教育三目標の意味をもう一度思い起こし、自己の目標に向かってしっかりと生きていってほしいと述べた。

その後来賓の方々の祝辞があり、卒業生を代表して初瀬希さんが三年間の思い出を込めて答辞を述べ、式は終了した。

附属幼稚園

第五十三回卒業式が三月十九日、建学記念講堂大ホールで行われた。開成学園理事長は卒業生八十二名に「げんきであらう、てんまでびよ」と書かれた卒業証書を一一人ひとりに手渡した。また、園内に咲いている同種の梅(白加賀)の苗木を卒業



記念として卒業生に贈った。卒業生を代表して富田真央さんが、ご家族には「こんなに大きくなりました」と感謝の言葉を、お友だちには「さようなら」とお別れを、「よう」とお答えした。保護者はわが子の成長した姿に感動し、目頭を押さえていた。

卒業研究発表会

■大学院人間生活学研究科 大学院修士課程の修士論文発表会が二月八日開催された。研究題目は次の通り。

▽高等学校における家庭科教育について

▽生活学研究所

▽市販梅漬けの色と嗜好性▽糖尿病について▽マダイ大根の作り方と利用に関する研究▽郷土の特産品を利用したアイスクリームの製作▽子どもの肥満防止のお菓子作り▽馬肉の遊離アミノ酸組成と脂肪酸組成▽世界各大陸の食文化と栄養バランスの差異

■短大・保育科

▽リズム劇「わがまま大男」▽リスムダンス指導法▽エリクソン・カールの絵本の世界▽オベレック「おひさまのスィッチ」▽人形劇「赤ずきんちゃん」▽逆位相波利用騒音防止スピーカーの試み▽造形活動と保護者のかかわりに関する一考察▽のび太に対するドラえもんサポートについて

■短大・文化学科

▽リズム劇「わがまま大男」▽リスムダンス指導法▽エリクソン・カールの絵本の世界▽オベレック「おひさまのスィッチ」▽人形劇「赤ずきんちゃん」▽逆位相波利用騒音防止スピーカーの試み▽造形活動と保護者のかかわりに関する一考察▽のび太に対するドラえもんサポートについて

■専攻科・文化学専攻

▽中世ヨーロッパの修道院とワイン▽後期旧石器時代前半期の石器製作技術研究

入学



入学式

附属高等学校

風薫るさわやかな季節に、せせらぎこみちの桜も新入生を祝うかのようにつぼみが開き始めた四月八日、建学記念講堂に二百四十名の新入生を迎え、厳粛なか盛大に第五十二回入学式が挙行された。

真新しい制服に身を包み、緊張感の中にも希望に満ちた新入生が一人ひとり呼名され、開成学園理事長と挨拶を交わす姿に、参列している保護者や在校生にもその緊張感や活気、会場全体が引き締まる感があった。

学長は告辞で、本学の建学の精神「尊敬・責任・自由」と高校の三目標について話し、自己と他との関係の中で存在する自己を確認し、自分を見失うことなく自己の目標に向けて努力することが「私を創る」ことに繋がるので、健康

に充分留意して、充実した学校生活を送ってほしいと述べた。

その後、来賓の学園家族会会長金澤裕氏や高校同窓会佐藤広子会長、それに本学、短大在学生代表、幼稚園児代表、在校生代表の祝辞が続いた。そして新入生を代表して佐藤愛美さんが「誓いの言葉」を述べ、最後に全員で校歌を斉唱し式を閉じた。



保護者と共に「開成の理想」を語る卒業生さん

入学式の翌々日、先輩が新入生を歓迎する対面式が行われ、クラス代表に花束を贈り入学を祝った。そして学業に部活動に共に精進することを誓い合った。

■生徒会が歓迎会

生徒会主催の新入生歓迎会が四月二十八日、建学記念講堂で開催された。生徒会長大河原那央さんと開成校長の歓迎の言葉のあと、アトラクションに移った。新体操部の華麗な踊り、弓道部の一糸乱れぬフーロンよさこい、「マーチングバンド部のドリル演奏、音楽

私が本校を志願したのは、小中学校と続けてきたバレーボールを今以上に真摯に練習したいと思ったからです。小学生の頃に見た当時の先輩方のプレーが忘れられず、「高校生になったら私もここでバレーがしたい」とずっと夢に描いてきました。どんなに技術があっても相手を思いやるチームワークがなければ絶対に勝てません。これからの三年間、私はチームワークを大切に、文武両道で充実した毎日を送りたいです。辛いことがあった時には、本校を志願した時の気持ちを思い出して、前向きな気持ちで乗り越えていきたいと思います。

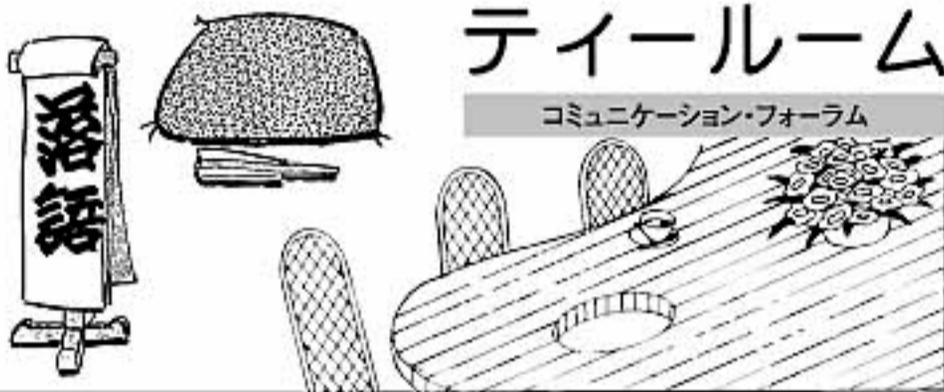
私は将来音楽の教員になりたいと思っています。そのため、どの高校を志願したらいいかを考えた時に一番迷ったのが本校でした。なぜなら、本校には県内でも唯一の音楽科があり、専門的な知識や技術をたくさん学べるからです。また、本校の音楽部は大変レベルが高いので、そこで活動してみたいと思ったのも本校を志願した理由の一つでした。これからは、本校で多くのことを学び、夢を叶えられるように日々努力していきたいと思っています。

私が本校を志願したのは、小中学校と続けてきたバレーボールを今以上に真摯に練習したいと思ったからです。小学生の頃に見た当時の先輩方のプレーが忘れられず、「高校生になったら私もここでバレーがしたい」とずっと夢に描いてきました。どんなに技術があっても相手を思いやるチームワークがなければ絶対に勝てません。これからの三年間、私はチームワークを大切に、文武両道で充実した毎日を送りたいです。辛いことがあった時には、本校を志願した時の気持ちを思い出して、前向きな気持ちで乗り越えていきたいと思います。

私が本校を志願したのは、小中学校と続けてきたバレーボールを今以上に真摯に練習したいと思ったからです。小学生の頃に見た当時の先輩方のプレーが忘れられず、「高校生になったら私もここでバレーがしたい」とずっと夢に描いてきました。どんなに技術があっても相手を思いやるチームワークがなければ絶対に勝てません。これからの三年間、私はチームワークを大切に、文武両道で充実した毎日を送りたいです。辛いことがあった時には、本校を志願した時の気持ちを思い出して、前向きな気持ちで乗り越えていきたいと思います。

ティールーム

コミュニケーション・フォーラム



古典落語との遭遇

小沼 依子

三十年前、新宿・末広亭の講座でいまはじき古今亭志ん朝の「愛宕山」を聞いた。江戸前の粋な語り口と、当代随一といわれるほど華やかで色気のある芸を展開し、客席を唸らせた。寄席がはねても私はその余韻からしばらくは心が震えていた。そして、落語と志ん朝に、ひと息で惚れた。高座にはきもの姿の志ん朝一人なのに、大店の若旦那や仲間や芸子たちの姿と、その情景さえもあざやかに見えるのだ。要するに落語は聞き手の想像力を巧みに引き出す高度な伝承芸であることを知らされた。それ以来、私の寄席通いはじまった。古典落語には、落とし斬、人情斬、怪談斬、芝居斬、音曲斬等々

がある。どの斬の結末もなにもかも知り尽くしながら、同じ落語を繰り返し、繰り返し、しかもわれを忘れて聞き入ってしまうのは、落語のしたたかな魅力にある。その一つをあげると、単にストーリーのおもしろさだけでなく、語り手のキャラクターとみがかき抜かれた技が大きく関わっている。「野ざらし」という斬も、柳家小三治と立川談志とは、描写、地口やかけあい、そしてしぐさがかなり異なるので、聞き手側の想像場面が妙に違ってくる。これぞ落語の真骨頂である。

十年前に都内から郡山に移り住んでからは、寄席に行く機会がめっきり減ってしまったが、なじみの斬家からは逐次ホットな情報が入るので、いまだ寄席の音連のひとりとして厳しく批判し、若手斬家の育成をつづけている。では、おあとがよろしいようぞ。(総務部長)



通いつめた寄席末広亭

研修旅行に参加して

細矢 瞳

私たち福祉情報専攻生はこの春二泊三日で東京・横浜方面へ研修旅行に出かけました。

未来の技術に触れる東芝科学館、情報の流れを学ぶニュースパーク、福祉体験プログラムとしてのグループホームやバリアフリー住宅見学など密度の濃い研修ができました。中でも心の中に強く残っているのが、障害者福祉センターに通っている人たちの心の強さです。身体に何らかの障害を持つている

人たちが、そのハンディキャップをカバーし、逆にそれを上手に生かして生活をしている。障害を持つているといふことをマイナスに考えるのではなく、他の能力でプラスに変えて明るく生活している姿に、逆に私たちが励まされる思いでした。

また、楽しい思い出もたくさんできました。新しい街づくりが進む横浜の「みなと未来21」での散策、イルミネーションが美しい夜のレインボーブリッジや東京タワーから見た宝石箱のような首都の夜景など今も鮮明に思い出されます。

三日間という短い期間でしたが、たくさんの方に触れ、学び、そしてクラスメイトや先生たちと学内とは違った雰囲気の中で楽しく語り合えたことはかけがえない思い出になるでしょう。(短大・家政科福祉情報専攻一年)



お台場でコース

感謝

藤田 美帆

最高学年になって今までの高校生活を振り返ってみると、中学校時代より充実した毎日を送れたように思います。

心から思うように思えるのは、放送部に出会えたからです。放送部に入部して、附属生としての自覚と誇りを持った先輩方の生き生きとした姿に感銘を受け、私も生活面や学習面に目標を持ちたいと考えました。こうして部活動を続けられたの



若石

も先輩方の笑顔や励まし、助けがあったことで、全国大会をはじめ、日々の放送部の活動を通して得た様々な経験は貴重なものとなりました。

部長になって悩みや不安で一杯になったときもありました。しかし、私を支えてくれる仲間たちがいたことで改めて仲間の大切さに気づき、乗り越えることができました。そして、残り少ない部活動の中で、後輩たちに最後までやり遂げることを素直に伝え、放送部での活動を通じて「美しい私」を創り続けてほしいと思います。

これからも先生方、友人、仲間、そして両親……私を支えてくれるすべての人への感謝の気持ちを忘れず、目標達成に向けて努力を続け、残り少ない高校生活を大切に過ごしていきたいです。(附属高等学校三年)

私の本棚

マーティン・セリグマン著

「オプティミストはなぜ成功するか」

講談社文庫

郡山女子大学短期大学部知覚教育学科

准教授 田村 修一

人生はよく旅にたとえられる。旅の途中で予期せぬ出来事に遭遇する時もある。そのとき、どうその出来事に向き合うか。それが、後の人生を左右することがある。

著者であるセリグマン博士は、フロ

食を取り巻く環境は、「食」と「健康」と「社会問題」がより密接に、より深くなり、かつてないほど変化しています。食料自給率が三九%に低下、食材料の高騰、外国産の食品や調理加工品の安全性など多くの課題を残しています。

一方、飽食時代を背景に心疾患、脳血管疾患、糖尿病、高血圧、脂質異常症などの生活習慣病が増加しています。これらの疾患は、食事、運動、休養(睡眠)、喫煙、飲酒、ストレス、肥満などが誘因となっており、中でも食生活が大きく影響していると言われています。

生活診断室 シリーズ②

健康と食生活

—生活習慣病の予防—

郡山女子大学食物栄養学科

准教授 三瓶 夕美

また生活習慣病を予防するためには、①自分の体や健康状態に関心を持ち、②適正な食生活(標準体重×生活活動量)を摂取し、③時々食生活を見直すことをお勧めします。そして、偏食せず、バランスの良い食事(主食・主菜・副菜を覚え、果物と牛乳をプラスで標準体重の維持を心がけてほしいと思います。

平成二十年四月からメタボリックシンドローム(内臓脂肪症候群)に着目した特定健診・特定保健指導がスタートしました。対象は四十歳以上七十四歳の被保険者、被扶養者で、生活習慣の改善が必要と判断された者に対して「情報提供」「動機付け支援」「積極的支援」に区分けさ

れた保健指導が行われます。自らの生活習慣の課題に気づき、健康的な行動変容の方向性を自ら導き出せるように支援するなどが求められています。国が提示したプログラムにより(社)福島県栄養士会も研修会を実施、郡山女子大学の教員(管理栄養士)の方々も受講され、「特定保健指導実践者育成研修」修了者として五名登録されました。本大学の「食生活・栄養研究所」の活性化および地域の皆様にも還元できるものと思います。今は元気、だけど……いつまでも健康で自分らしく生き、

イト以来の革命的理論家と呼ばれる心理学者で、アメリカ心理学会会長も務めた。彼はこの本の中で楽観主義の人生をすすめている。では、楽観主義の対極である悲観主義とどう違うのか。彼は、悪い出来事が起こった時の説明スタイル(心の持ち方)の違いにあると言っている。

現代社会は選択の時代。どう生きるかは個人の自由。楽観主義を現実逃避や責任転嫁に利用するのは良くない。しかしながら、自分の人生を前向きに、そして価値あるものにするためには、楽観主義は、大きな味方となるような気がする。自分のこれまでの生き方を振り返り、未来を見つめる一つの指針として、是非一読をおすすめしたい。

悲観主義の人は、悪い出来事に遭遇した時、①「永続的」悪い事は、いつまでも続くだろう、②「普遍的」今回だけでなく、また挫折するだろう、③「内向的」不幸の原因はすべて自分にあるという考え方に特徴がある。

一方、楽観主義の人は、①「一時

ようこそ 郡山開成学園へ

新任教職員の方々のご紹介

大学

【新採用】
山形 敏明 准教授
北海道工業大学大学院経済工学専攻博士課程修了、工学博士、日本製鋼所株式会社開発員、所属、人間生活学科
担当教員、人間生活学科

【期限付採用】
鈴木 美由紀 助手
郡山女子大学大学院人間生活学研究科修士課程修了、二級衣類管理士
所属、人間生活学科(学務担当)担当、学務事務員、学生生活課

【新採用】
横田 和子 助手
郡山女子大学大学院人間生活学研究科修士課程修了、管理栄養士、調理師
所属、食物栄養学科(学務担当)

【新採用】
石川 穂子 講師
福島大学教育学部卒業、教育庁指導主任、最上あきか開成高校校長を歴任
所属、経営情報専攻

【本採用】
佐藤野 陽子 助手
郡山女子大学短期大学部音楽科卒業、王川大学通信教育部卒業、音楽科期限付助手(十四年から)、音楽療法士(二種免許)、所属、音楽科(学務担当)

【期限付採用】
尾本 暎子 講師
大阪府立大学卒業後復職し、パリ・ニコール・ノルマル音楽院修了、パリ音楽文化学院音韻講師、音楽家資格(OBRA)取得、所属、音楽科

【期限付採用】
陣野 是るか 助手
郡山女子大学短期大学部保育科卒業、幼稚園教諭免許、保育士
所属、幼児教育学科(学務担当)

【期限付採用】
河村 陽子 講師
郡山女子大学家政学専攻人衛生学専攻卒業、短大家政学専攻助手、所属、保健医療科

【期限付採用】
清水 和博 講師
山梨大学大学院工学研究科博士課程修了、富士通カンパムシステム(株)入社
担当教員、理科

【本採用】
青木 麗菜 講師
早稲田大学大学院教育学研究科修士課程修了
担当教員、地理、公民

【本採用】
渡部 晋太郎 講師
東京理科大学理学部数学科卒業
担当教員、数学

【本採用】
高橋 正 講師
日本体育大学体育学部体育学科卒業
担当教員、保健体育

【新採用】
三浦 真子 教諭
郡山女子大学短期大学部保育科卒業、元短大幼稚園教諭
所属、幼稚園

【本採用】
藤田 智子 教諭
郡山女子大学短期大学部保育科卒業、同科期限付助手(十六年から)
所属、幼稚園

【期限付採用】
藤田 美奈 教諭
郡山女子大学短期大学部保育科卒業、幼稚園教諭免許、保育士
所属、幼稚園

【本採用】
金野 千穂里 助手
郡山女子大学短期大学部音楽科卒業、短期大学生活指導係(十六年から)
所属、音楽科

【期限付採用】
工藤 雅友 助手
郡山女子大学短期大学部家政科食物栄養専攻卒業
担当、生活指導係

【期限付採用】
安藤 麻生 職員
郡山女子大学大学院人間生活学専攻修士課程修了
所属、学務部教務課

NEWS 学園ニュース

地域の野菜で安全・安心 食物栄養学科が市民フォーラム

本学主催の第三回市民フォーラムが三月八日、芸術館大教室で開催された。テーマは「身近な食を考える」で今回は「野菜」が主役。宇都宮大学宇田靖教授が「地域の伝統野菜の見直しで地域づくり、人づくり、そして健康づくり」と題して、郡山農業青年会議所の鈴木光一さんが「地域ブランド野菜への取り組み」、本学の庄司一郎教授が「屋上菜園での食と命の教育」、同広井勝教授が「地域食の新たな利用(本学での取り組み)」と題し、それぞれに研究内容の発表や実践報告で地域野菜の安全・安心を強調した。



市民の関心が高まったフォーラム

聴講者は約百名。特に地域ブランドとして開発された「佐助なす」 「ささげつ子」「御前人参」「冬甘菜」等に関心が集まり、「農場を見学できるのか」「商品は市販されているのか」などの質問が相次いだ。

音楽療法の活動 KGC音楽研究会

平成十九年度KGC音楽研究会が三月六日開催された。本学園の音楽関係教職員研修会で二十回目を迎えた。今回は、名古屋音楽大学教授栗林文雄音楽教育学博士が「音楽療法の理解」と題して講演した。栗林氏は本学でも音楽療法士養成課程で講師を務めている。講演は音楽療法の臨床活動の実践を、音楽の力を使用した緩和ケアとして説明した。参加者は実践を加えての講演に理解を深めた。

飛板飛込で全国四位 大人間生活学科二年の毛文輝さん

大人間生活学科二年の毛文輝さんは、四月四日から東京都辰巳国際水泳場で開かれた第八十四回日本選手権水泳飛込競技大会で、女子一メートル飛板飛込で四位、三メートル飛板飛込で五位、十メートル飛板飛込で五位の好成績を残した。



喜びやけに—1日人の相

若人の可能性に満ちた作品展示 —短大・生活芸術科—

第五十二回生活芸術科卒業制作展が二月十四日から十九日まで建学記念講堂ギャラリーで開催された。二年生二十八人が二年間の学習成果を発表した。会場には、油彩画、デザイン、CGアート、彫刻、染色の各分野から構想を練り上げて完成した作品六十点が展示された。訪れた人々は、豊かな感性と創作の意欲が満ち溢れた作品に若人の大きな可能性を感じとり、一点一点じっくり鑑賞していた。

調理技術の集大成—高校— 食物科卒業作品発表会

調理技術の集大成、日本・西洋・中国料理などの各分野で展示発表した。また、わが家の伝承料理「祖母から母へ、母から娘へ伝えたい料理」をテーマに各家庭に受け継がれてきた料理の数々が並んだ。三年間の教育の成果が実り、生徒たちの成長の様子が強く感じられた発表会であった。



注目の料理、伝承料理

平成十九年度で退職された方々

【第一定年】
▲大学/広井勝教授・林哲子教授▲高校/川名忠造教授・鈴木正幸・大塚啓一(理事長)・木美代子(教務)・末永美枝子(教務)・安藤紀子(教務)・吉田フク子(教務)▲事務局/水野武夫事務室長(第一定年)
▲高校/長谷川雅子教諭

銀賞に輝く高校音楽部 第一回音楽アンサンブル全国大会

三月二十一日、福島市音楽堂で第一回音楽アンサンブルコンテスト全国大会が開催された。このコンテストは二名から十六名でハーモニイを奏する大会で、全国から九十六団体が出場した。高校の部に出場した本校音楽部は、先の県大会で一位となり県合唱連盟からの推薦を受けて臨んだ晴れ舞台。演奏曲はジークフリード・ドシエ「トロパッパ作曲」「アベマリア」「アレジーナ・チェロルム」の二曲。結果は銀賞の八位。本校の持ち味である美しい発声を十分に発揮し、十六名心をひとつにしたアンサンブルが評価された。



学園に誇りを表す学生

会は昨年十二月四日、五日の二日間開催された。「調理師資格取得」のために身につけてきた三年間の調理技術を、日本・西洋・中国料理などの各分野で展示発表した。また、わが家の伝承料理「祖母から母へ、母から娘へ伝えたい料理」をテーマに各家庭に受け継がれてきた料理の数々が並んだ。三年間の教育の成果が実り、生徒たちの成長の様子が強く感じられた発表会であった。

ぼくとわたしの発表会 —附属幼稚園—

附属幼稚園の「ぼくとわたしの発表会」は二月二十日から開かれ、園児たちが保育中に教わり練習した劇やダンスを各組ごとに三日間にわたって披露した。



一生懸命に演技する園児

ご冥福をお祈りします

高橋 哲夫氏
平成二十年一月二十三日死去。八十九歳。氏は元本学園理事長。大学園図書館長、短大文化学科主任教授を務められた。
角 真一氏
平成二十年四月二日死去。四十七歳。氏は附属高校美術科主任として勤務。院展に春、秋、通算二十六回入選している。

家庭寮 新一号館

四月オープン
耐震・防火も万全

集団生活を体験させる「家庭寮」の新一号館が落成し四月から新しい入居者の生活が始まっている。



新一号館(左)の完成図(パースより)

家庭寮は学園に隣接して三棟あるが、一号館が老朽化したため、耐震構造による新たな設計で工事を進めてきた。三月末にめでたく完成し運用を始めた。

二十二室を備えた寮には初代入居者として四十四名が集団生活しているが、口を揃えて「快適」を唱えている。



新しいダイニングで会話が弾む

劇とあそびのつどい

短大・幼児教育学科



出演者総士のフィナーレ

短大・保育科の伝統行事「劇とあそびのつどい」は幼児教育学科と科名変更後も継続され、学生手作りのイベントとして二十四回目を迎えた。二月三日、建学記念講堂には保育士や幼稚園教諭を目標とする学生三百四十名が総出演で親子連れの地域の人も約千名をお迎えした。保育科最後の卒業予定者と幼児教育学科一年生による舞台は、息の合った歌とおどりでリズム劇「わがままな大男」オペレッタ「おひさまのスイッチ」や人形劇「赤ずきんちゃん」などを次々と披露した。また、児童がステージで一緒に踊る場面もあり楽しさも倍増、学習成果を充分に示した。

一方、ギャラリイでは「おあそびコーナー」が設置され、ダンボールで作った迷路や手作り玩具は子どもたちに喜ばれた。

東日本大会で二年連続優勝

インスタントラーメン料理コンテスト

日本即席食品工業協会主催の、大学短大専門学校、高校で栄養士・調理師を目指す学生を対象に「インスタントラーメンオリジナル料理コンテスト」が二月十一日に開催された。本校食料科三年(受賞当時二年)の坂井相奈さんが、昨年に続き優勝した。五百四十七点の応募作品から二年連続の優勝は大会始まって以来の快挙で注目された。また、本短大食物栄養専攻一年(当時)の原田朋江さんが三位、さらに当時本校三年生の稲田優子さんが第四位に選ばれた。

優勝した坂井さんの作品は「ふわっ・もちっ・ラーメン団子汁」、稲田さんは「東北の味・みそケキ」と感性をいかしたオリジナリテイあふれる作品となった。



▼稲田さんの作品「みそケキ」

▲優勝した坂井さんの作品



田村典也(左)賞状と共に、坂井さん(中)、稲田さん



大河原さんの作品「舞踏」

八月に東京都の国立劇場で開催される全国高等学校総合文化祭優秀校東京公演のポスター募集で、本校美術科二年の大河原成美さんが全国二位に当たる優秀賞を、同じく遠藤千鶴さんが優良賞を揃って受賞した。また、特別賞として「学校賞」を併せて受賞し大きな喜びとなった。

大河原さんの作品は文化祭プログラムの表紙を飾ることになっている。



環境大臣賞受賞の藤森さんの作品

環境省の平成二十年版「環境・循環型社会白書」の表紙絵コンクールで本校美術科二年の藤森千嘉さんの作品が最優秀賞の環境大臣賞に選ばれた。高校生以上の一般部への出品で本校としては初参加・初入賞の快挙となった。

紙上美術展 55

本学所蔵 附属幼稚園

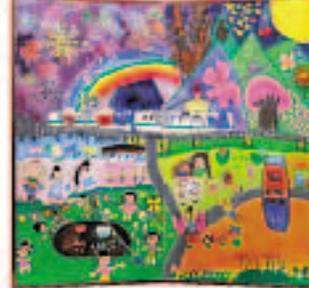
第五十三回 卒業記念屏風
この表、幼稚園を巣立った八十二名の園児が、例年恒例の卒業記念として残した屏風絵。たくさんのお思い出を一つひとつ情いた作品である。



「みんな いっしょ」—— もみじ組
みんなでお泊まり保育で花火を見たこと。みんながバスや電車に乗って遠足に出かけたこと。みんなが雪遊びをしたこと。みんながいたから。たくさんのお思い出ができました。みんな みんな 一緒だよ。



「ようちえんのおもいで」—— まつ組
春、桃色の桜の木の下で鬼ごっこ。夏、さらさら光るみどり色のなかよし広場でプール遊び。秋、園庭の黄色い銀杏の葉っぱでお弁当屋さんごっこ。冬、力を合わせてかまくらづくり。楽しかったねー 幼稚園



「みんなのおもいで……」—— やなぎ組
僕が五歳の時、わたしが六歳の時、幼稚園はとも楽しかったね。お泊まり保育で見た花火。別あがり幼稚園バスのなかで見たきれいな虹。電車で行った秋の遠足。そして、みんなで行った運動会。いつまでも 忘れないよ。

木もれ陽

春は新年度のため気持ちすがすがしく周回も華やかなり、学園は新生活を迎えて生き生きとした雰囲気溢れている。卒業生をこの間送ったばかりの過去、そして現在。しかし、それは単なる時の移行などではなく、過去が再生されて現在に甦って来たような気がする。

フランスの詩人がオル・クロオアルに「断章(二) 河口大津浪詩集(月下の一群) 所収」という春の詩がある。

またしても多くの若い日のあざとやましい太陽が青い空に輝き出す。／やがて冬が終り、やがてまた春が来る。／さうして朝は娘の衣を帯びて出る。／不吉な鐘の鳴き声と／

泣く北風の口笛のあとで、いま私は鐘の鳴くのをきく。／鐘の音の上で先きはど私は見た。／穴から這ひ出して来る熱々な裸身を。／すべては静か、温か、ひらめいて、／生一本をまろく、神々しき、／やがて来る夏の信念が、／少しづつ生れし行き渡る。／かすかに私の頬をなでて吹く。／また力よわむこの風。／私は知てる、これが風だ。

フランス語の原詩からこの素晴らしい日本語訳が堀口によってなされたのは大正十四年であった。ここではもうフランスも日本も同じで、ここには私たちがいる。詩人佐藤春夫はこの生涯の友人による訳を賞賛した。二人は大学の同級生でもあった。そこで、学び舎とは新しくそして生涯にもわたる大切な人やものとの出会いの場でもあるのである。

(均)